

〈合評会〉太田匡洋『もう一つの19世紀ドイツ哲学史——ポストカントにおける哲学方法論の系譜』（京都大学学術出版会、2022年）

超越論哲学の「再心理学化」？

——1800年前後のドイツにおける「哲学」と「心理学」をめぐって——

久富 峻介

はじめに—本稿の課題と見通しについて

本報告は、太田匡洋『もう一つの19世紀ドイツ哲学史』（以下、それぞれ著者と本書と略記し、括弧のなかの数字は本書の頁数を指す）のうち、主に1章「批判主義の徹底化による哲学的方法論の主題化——J. F. フリースの哲学」を取り上げる。第1章の主題は、比較的明確で、フリースを「批判主義の徹底化（＝ポスト・カント哲学）」として位置づける際に、その方法論が心理学的ではなく哲学的だと強調することで、従来の「心理（学）主義」というレッテルを剥がすことにある。そのために著者はフリースの著作を挙げながら、その独自の方法論の特質を明らかにしようとしている。

本報告では、1章の内容の要約は（問題設定や叙述などが明確であるため）必要最低限にとどめつつ、評者自身の問題関心を踏まえながら、ポスト・カント哲学の受容と、当時のドイツ（イエーナ）での「心理学」という2つのトピックから著者の主張を考察したい。

1. 対立点としての「心理学」の位置づけ

著者の狙いは、これまで支配的であった〈フリース思想＝心理主義〉という見方を修正することで、フリース哲学を再評価し、「（ドイツ観念論に代わる）ドイツ古典哲学」の流れのうちに適切に位置づけ直すことにある。しかしながら、そのためには——著者も十分に承知していることだが——カント哲学の批判的受容をはじめとした、当時のドイツ（特に、イエーナ大学哲学部内）のコンテクストからフリースを再構成することが要求される。本報告では、焦点のひとつとなる「心理学（Psychologie）」¹の概念に注目しよう。近代ドイツの哲学史において「心理学」を扱う際に留意しておかねばならない点は2つある。ひとつは、ヴォルフ以来、「心理学」は「形而上学」の内部に位置づけられてきた伝統があることであり、もうひとつは、カントの批判哲学の登場以降、その位置づけに微妙な変化が生じたことである。本書が論じている思想が生まれた時期は、まさにその過渡期にある（その震源地のひとつが、批判哲学の受容

¹ 今日では、一般に「心理学」は「心」や「認知」の働き・心的過程を探求する（平たく言えば、人が何かを行なったり、何かが起こったりしたときにどのような精神状態に陥る傾向があるのか）学問の分野だと理解されているだろうが、もちろんここで問題になるのはそうした意味での「心理学」ではない。

が最も盛んだった都市であるイエーナであり、本書が扱うフリースが哲学を講じていたのもこのイエーナだった)。

周知のことだが、まず「心理学」の位置づけについて一般的な概観をしておくと、18世紀のドイツの哲学の伝統では、「形而上学」の下位に「心理学」が置かれ、それがさらに「経験的心理学(心の「ア・ポステリオリな方法」での探求)」と「合理的心理学(心の「ア・プリオリな方法」での探求)」とに区分される。「経験的心理学」は「認識能力」と「欲求能力」から成り、それらの能力はさらに「上級認識能力/下級認識能力」と「上級欲求能力/下級欲求能力」とに分かれる²。とはいえ、「心理学(的)」という概念の指すところは、そう単純に整理できるものではない。カッシーラーが主張していることだが、カントの批判哲学が登場して以降でさえ、ドイツでは「超越論的方法」と「心理学的的方法」とは明確に区別されず、両者は渾然一体として用いられてきた³。

著者は、1828年のヘルバルトを起点にしながら(28頁)、近年のF. C. バイザーに至るまで、フリースが主に「心理(学)主義者」として見なされてきたことを追跡している。一般的な観点からすれば、たしかにこうした種類の「レッテル貼り」は哲学史研究においてしばしば見られる「単純化」によるものであるし、もっと言えば、当時のリアルタイムの批判的応酬の現場でさえ散見される。たとえば、カントの「超越論的論理学」はバルディリにとっては「心理主義」「主観主義」であったし、批判哲学の「分析判断/総合判断」の区別でさえ、当時のヴォルフ主義者から「心理主義的」という批判を浴びていた⁴。これらのケースでなされる「心理主義的」という言葉が指すところは、「心理学の方法にもとづいている」ということあれば、たんに「経験的」「非客観的」「独断的」といった程度の意味で用いられていることもあるように思われる。

しかし、それではフリースに対する批判もこうした類のものなのかと言えば、彼の場合そう単純ではなく、むしろ「心理学(的)」はフリースの重要なキーワードである。その証拠に、何よりフリース自身が「心理学」や「人間学」という術語を(自身の著作のタイトルにさえ)使用しているし、実際、フリースはキャリアのごく初期に「経験心理学者」のシュミート(Carl Christian Erhard Schmid, 1761-1812)に接近していたことが挙げられる。当時シュミートは、批判哲学の受容のかなり早い時期にカ

² ヴォルフは「経験的心理学」のうちで「意志」や「自由」を論じていた。カントについても簡単にまとめておくと、彼も第一批判以前にはおおむねこの学の体系像にしたがっていたと言えるが、『純粹理性批判』「誤謬推論」になると「合理的心理学(純粹心理学)」は否定される。また、「自由」の問題も「誤謬推論」や「心理学」ではなく、「(第三)アンチノミー」で扱われるというように、主題の移動が認められる。カントの表現では、「(経験的)心理学」は「内的感官の自然学」(KrV, A. 381)とされる。この点については、河村、2022年も参照。

³ Vgl. Cassirer (1992), S. 123ff.

⁴ これらの点については、Beiser (1987), Chap. 7, bes. S. 195.

ントの教本を出版していた「カント主義者」のひとりであったが、フリースは彼が刊行する『心理学雑誌 (*Psychologisches Magazin*)』に5本論文を掲載することになる。このときの両者の関心は、「カントの批判主義という観点から、心理学的・人間学的諸問題を解明すること」⁵にあったと言われることもある。

こうした史実的な観点からしても、フリースに「心理学的な」要素がまったくないと主張すること自体には、あまり意味がないように思われる。もし「心理学(的)」という特質づけをすべきでないとするれば、フリースにまったく非がないとは言えないだろう。本書の主眼がこの点への反批判にあるかはさておき、重要なのは——本章の表題にもあるように——それが「批判主義の徹底」としてどういう内実を持っているのか、私たちが「彼の心理学的要素」をどう評価しうるのか、であろう。それゆえ以下では、私たちがフリースを「哲学」ないし「方法論」としてどのように評価すべきなのか、当時のコンテクストから見てそれはどのように位置づけられうる議論なのか、ということに課題を集中させたい。

著者は、本書序論でフリースの基本的な狙いを、次のようにまとめる(34-37頁)。

- (1) 「哲学」は「論理学」と「形而上学」とから成る「体系的統一」を持つ「学」である。
- (2) その「体系」としての「哲学」に至るには、特別な「方法」が要求される。彼はそれを「理性批判」と呼び、それは「哲学」に先行する、或る種の「予備学」である。
- (3) 「心理学」も「人間学」も、「理性批判」のための手段であり、「ア・プリオリな認識の本性」の解明に資する。

これも既知のことがらに属するが、「哲学は体系形式であるべき」という要請は当時のドイツの時代的なものであり、フリースの(1)の主張もまたこれを承けたものと思われる⁶。だが、それだけではなく「エンツュクロペディ(百科事典)」という構想に見られるように、当時は「学問」ないし「知」を体系化しようというムーブメントもまた盛んであり、その領域の配置は、人間の能力に対応づけられてなされることがしばしばであった。着目したいのは、そうした際に「心理学」が「予備学」や「入門学」と見なされてきたことである。

フリースもまた、こうした当時の常識にしたがっていると思われる。「理性批判」にせよ、「心理学」や「人間学」にせよ、彼にとってそれは「哲学」へと向かう通路にすぎない。問題は「方法論」にあり、著者によれば、ラインホルト、フィヒテ、シェリ

⁵ Schröpfer (1995), S. 41.

⁶ 「論理学」と「形而上学」という区分も、ヴォルフ以来の伝統となった当時のドイツの大学の学問区分にしたがっている。

ングらが採用する「知の最高原理からの導出」や「知的直観」のオルタナティブとなる、フリースの「哲学する技法」(48-49 頁)の方法論の意義を認めるべきだという。本書が主張したいのは、その方法論的特質だけに注目してフリースを「心理学者(心理主義者)」「人間学者(人間学主義者)」と見なすのは適切ではないということであろう(評者の印象では、この「哲学」をどう解するかこそ、ポスト・カント哲学で様々な軋轢が生みだされた元凶のように思われるが、それは本書の主題ではない)。

評者の見立てでは、フリースの立場を整理するための核心は「経験的」というポイントにある。実際このことは、ラインホルトらの方法論を「不当な抽象の産物」(49 頁)だとし、フリースの方法が「通常経験」から出発すると著者が強調していることから明らかであろう。「たとえ〔哲学の〕原理がア・プリオリなものであっても、その原理の認識それ自体は、経験的なものでありえる」(61 頁)とか、「カントが超越論的な教説と呼んだこの〔理性批判の〕教説は、内的な経験の学問としての経験心理学に属する」と主張して、「カントは〔…〕超越論的認識のもつ経験心理学的な本性を見誤った」と批判する(63 頁)などは、どれもこの点を衝いている。フリースが言いたいのは、「内的な経験」や「内的な知覚」そのものは「経験的なもの」であるはずにもかかわらず、それを「ア・プリオリな認識」(62 頁)と誤解することに、ラインホルトらによる哲学の誤謬の源泉があるということだろう。フリースにとっては、「根本命題」にしても「知的直観」にしても、それらはいずれも私たちの通常の感得作用を越えたものであるがゆえに、方法論として認めることはできない。つまり、ここではたんに「方法論」が問題というわけではなく、哲学の「方法論」が経験的でなければならぬ、という点に重点が置かれている。カントの「超越論的な教説」が「内的な経験の学問」、「経験心理学」であるという、一見するとたんなる誤解にしか思われぬ批判も、この立場から発せられている。これをもう少し敷衍すれば、私たちの認識能力や経験の対象は、〈経験の地平〉と接していなければならないということである。ラインホルトも、(1797 年以降の)フィヒテも、1800 年頃までのシェリングも、知性が「働きの作用そのもの」を直観したり、通常の意味での客観の根底にある「実在性」の源泉そのものを直観したりする知性の働きを認めていた。三者は、それぞれのあいだに若干の立場の違いはあれども、「自己直観」としての「知的直観」を方法論としていたが、それらは非感性的直観であるから、当然ながら非経験的な感得作用である。これこそが、フリースと彼らのあいだの核心的な争点と見なされるべきであろう。

ところで、「認識の対象」について、必ず問題とならねばならないのは「実在性」である。つまり、いかなる内容についても認識であっても、錯覚や妄言ではなく、真なる対象についての認識でなければならない。評者の疑問は、69 から 81 頁、88 から 90 頁までの「日常的な生活における通常の諸判断」(69、88 頁)や「一般的な諸判定」(81 頁)における「哲学の対象」の特殊なステータスについてである。それは「背進

的方法」による分析、「演繹」（56頁）ないし「抽象」（88頁）によって「理性の直接的な認識」のうちに生じる（「呈示される」）とされ、そのうちにはすでに「カテゴリー」（＝「実在的な（reel）関係」（69, 73頁）が含まれているとされる。たしかに、それ自身経験的である「理性批判」のうちから生じる判断が「実在性」を含んでいるという話や、「カテゴリー」によって分節化されている限りでたんなる「感性的直観」や「感覚的所与」（69頁）ではないとされることは奇妙ではない。それは「理性」のうちにある「カテゴリー」⁷である限りで、経験や純粹直観に由来しないということも言えるかもしれない。

しかしながら、第一に、それが「理性」のうちの「直接的な認識」に与えられるという点が「独断論」や「経験論」ではない（vgl. 70頁）と言えるのは、なぜなのだろうか。フリースの場合、「理性」は「感性」と結びついているのだから、彼が〈直接的な認識〉が経験的ではなく、かつ経験的な要素を含みうるような「心の能力」にもとづくその認識は「感性」や「論理（学）」とは区別される「第三項」（70頁）である〉と主張しうるためには、「経験の領域」や「論理の領域」とのあいだに明確な境界線が必要なように思われるが、その機序が判然としないように見える。あるいは、その「カテゴリー」が「実在性」を主張する場合、その根拠はどこから湧いてくるのだろうか。もう少し言えば、日常で下される「判断」や「認識」の「客観的な reel さ（実在性）」は、フリースの場合には何に由来する（あるいは、何が担保する）のだろうか。カントであれば、一方では「物自体」からの触発に由来する感性的で外的な認識の「素材」に、他方では主観の側にある「多様の統一」の「規則」に見いだすであろう（KrV, B 194; 150, 194）。フィヒテであれば、それを自我の働きとその阻害によって生じる「強制的感情（必然性）」に求めるだろう（GA I /2, 378）。いわゆる「自我哲学期」のシェリングであれば「絶対的自我」の「知的直観」によって「知の実在性」の根拠を説明するであろうし（vgl. HKA I /3, 87）、少しあとの「自然哲学期」であれば、客観（自然）の側に自我とは独立する別の原理を認めるであろう。この「自然哲学期」ないし「同一哲学期」のシェリングとフィヒテとのあいだの対立が決定的になった1800年11月の書簡の争点が、「自然」の側に原理を認めるか否かであったことを思い起こすとき、フリースを「ドイツ古典哲学」のうちに位置づける際には、最も重要な争点のひとつになるのではないかと思われる。本書の分類に限ってみても、もし「実在性」の源泉を客観の側の存在に求めているのであれば、それは「経験主義的な」要素が強いと言えるであろうし、もし理性の働きのうちにすでにあるのだと主張するならば、それは「経験心理学的」と見なされるか、または「独断論的な」色彩が強くなるように思われる（だが、本書を読む限り、おそらくフリースは独断論とは考えていないだろう。第二の論点に関わることだが、彼は「内的な経験」や「自己観察」という「事

⁷ たたとえば、「因果性」や「実体性」など（88頁）。

実」にもとづくかぎり、「独断論的」要素は含まないと主張するはずであり、ここに「心理学」が関わると思われる)。つまり問題は、経験的な諸判断と〈地続き〉であるはずの「カテゴリー」⁸が、たとえ「抽象」を経ているとはいえ、「経験的」でもなく「(純粹に)論理的」でもないとするならば、そのステータスはどのような特質のものなのか、である。

もう少し大きな問題に関連づけて言えば、先述のように「ア・プリオリな原理」それ自体が〈経験の地平〉を超越しているとしても「その原理の認識は経験的である」ならば、両者の地平が交わるような接点はどこに見いだされるのか。著者によれば、1803年から1804年頃に、「哲学の対象」が「通常の経験」から「日常的な生活における通常の諸判断」へと移ったことが説かれているが、その「諸判定」が「前提」されているとか(71頁)、「哲学的な認識」を含んでいるとか(ibid.)、「内的な経験」に属している(79頁)などとも言われるとき、その「前提」は経験的な「(自己)観察」によってもたらされる、と考えているように見える。つまり、かの接点を「内的な経験」という〈事実の地平〉に見いだしているのではないか。そうだとすれば、その「前提」の解明は、超越論的ではなく、経験心理学的に(つまり、〈事実の地平〉で)なされていると見なさねばならないのではないかと思われる。言い換えれば、ここで問題になっているのは、「諸判定」が、「日常的な判断」のように〈外的な経験の領域〉で見いだすことができないとはいえ、〈内的な経験の領域〉では直接的に認められている限りにおいて、経験と切り離されているわけではないはずである。そうである以上、フリースは「第三項」を打ち立てるといような理論的な回避を成しえていないのではないかという疑念が生じる(もし、完全に切り離されているのであれば、今度は「論理(学)」との区別が問題にならざるをえない)。この点は、次の第二のポイントにも関連する。

第二に、(経験)心理学的な「内的な経験」や「自己観察」が「哲学すること」への通路であるならば(vgl. 79頁)、やはりその方法論は「経験心理学的」と呼ばれるべきではないかと思われる。「心の能力」の区別や、「哲学的な認識」が「意識の事実」にもとづいていると主張するのであれば、少なくとも、経験心理学にかなり近い位置にあるとは言わねばならないはずである。たしかに、本書が言うように、フリース自身はその「予備学」や導入となる「経験的な学問」を「経験心理学」ではなく、「哲学的人間学」と呼称しながら「心理学」の役割を制限(79-80頁)しているが、しかしこのことは、「いわゆる心理主義へと陥ることを周到に回避している」(ibid.)と評価しうるのだろうか⁹。ここで著者が指す「いわゆる心理主義」とは、たとえば、本書が取

⁸ 「理性」の「結合形式」は、我々の経験のうちで「実在的な関係」を形成するとされる(72-73頁)。

⁹ なぜ「心理学」や「人間学」でなければならないのか。本書では必ずしも明らかではないが、こちらも当時の哲学界の状況を踏まえなければ事情は見えてこない。1800年頃の当時のドイ

り上げているヴィンデルバントが言うような「経験的・心理学的な基礎づけという観点のもとで、形而上学的な教説を処理すること」で、「観察する精神の自己認識としての経験心理学のうちにすべての哲学の基礎が求められねばならない」（64頁）とする立場であるが、そうした特質は、まさしくフリースに該当するのではないかと思われる。（ヴィンデルバントの「処理する」の意味は必ずしも明確ではないが、とはいえ）著者が初期の転換を見いだす「心理学と形而上学」（1798年）においてさえ、方法論としての「哲学すること」と経験的な「通常の諸判定」とが「同定」される（つまり、同じ事態である）ならば、それはフリースの哲学が「経験的な方法論に基礎を置いている」のだ、と見なさねばならないように思われる。このことは、後年フリースが『新理性批判』などで「一般的な諸判定」を「哲学の対象」に移したとはいえ、それが究極的には経験的な「内的な経験」や「内的知覚」（vgl. 79頁）から湧き出てくるのであれば、議論の重点に変化はあれども、事態は依然として同じなのではないだろうか。ヴィンデルバントらの批判は、フリースが「心理学者」だという点にではなく、基礎づけの方法をめぐった評価であるのだから。

このことは、フリースが批判するラインホルト、フィヒテ、シェリングと対比することでより鮮明になる。ラインホルトやフィヒテ、シェリングであれば、経験的な「内的な経験」や「自己観察」などには、いかなる意味でも、積極的な哲学的・方法論的意義を認めないだろう¹⁰。彼らが梃子にする「知的直観」は、（カントが想定した「知的直観」とは異なり）たしかにある種の「自己直観」であり、それゆえその知的作用は自己を対象にしているとはいえるだろうが、それらは極めて超越論的な意味でしか用いられていない。フィヒテが『知識学への第二序論』で「読者」に対して「誰もが、自己自身を思惟することができるだろう」と述べたり、「哲学者」のある種の「自己観察」に言及したりするときでさえ（vgl. GA I /4, 215）、それらには「経験心理学的な」含みはない。これに対して、「知的直観」を拒否しているフリースは、「我々の内的直観」は「知的」ではなく、私たちにはあくまで「感性的な」直観しか与えられていないことを強調している（vgl. 86, 116頁）。「知的直観」の扱いに関しては、フリースはカントの枠組みにとどまっているが、そのポイントはおそらくカントとは異なり、フリースにとって「心の能力」としての「悟性」にも「理性」にもそのような超感性的な働きが認められないことにもとづいていると思われる。このことを言い換えれば、フリースは「内的な経験」たる「心の働き」という〈事実の地平〉で「哲学」していると言えるだろう。

ツでは、「心理学」と並んで「人間学」も体系の位置づけが大きく変化した学問であり、いずれも形而上学と関連づけられることがあったという（vgl. John (2002), S. 169）。「心理学」と呼ぶにしても、「人間学」と呼ぶにしても、経験的な学問の分野を指すという大意に変更はないと思われる。

¹⁰ シェリングの「経験心理学」の扱いについては、Zantwijk et. al. (2001), SS. 16ff. も参照。

このようにあくまで経験的なものに基礎を置く立場は、ポスト・カント哲学の受容としては、明らかにかの三者とは違う方向性を示している。というのも、ラインホルトもフィヒテもシェリングも、そもそもそうした「内的な経験」や「知」そのものを生み出す〈メタの次元〉の問題を「哲学」と捉えているからである。ラインホルトは『寄稿集』(1790年)で『『純粹理性批判』の主たる仕事である表象の諸形式を打ち立てる際に、この著作で根拠(Grund)として使用されているものすべては、表象能力の理論においてまさにこれらの諸形式を打ち立て〔た〕際には、たんなる帰結(Folge)として現れてくる』¹¹と言い、『エーネジデムス書評』(1793年)のフィヒテは「〔根本命題を打ち立てることで、哲学は〕学という地位に高まらねばならない」(GA I /2, 42)と述べ、シェリングもまた1795年12月24日付の書簡でヘーゲルに宛てて「カントは結果(Resultate)をもたらしたが、その前提は欠けています。誰が前提なくして結果を理解できるのでしょうか」(Br. 14)と書き送っている。彼らの問題意識は共通しており、「哲学」の課題の所在をいわば〈メタレベル〉での「知」の根拠づけに見ている。彼らにとっては、〈事実の地平〉の問題はおしなべて「哲学」の「帰結」にすぎない。よって、フリースとラインホルト、フィヒテ、シェリングのあいだでは、そもそも「哲学」は〈共通の言語〉とはなっていないと言ふべきである。評者には、「抽象」概念を軸にしたフリースによる批判(88頁以下)において根本的に問われるべきは、「抽象」や「方法論」の扱いではなく、そもそも「哲学」が担うべき「使命」という問題機軸の差異にあるように思われる。

2. 「物自体」をめぐる——再び、ラインホルト・フィヒテ・シェリング vs. フリース

ヤコービの『デイヴィッド・ヒューム』の付録「超越論的観念論について」における「私は、かの〔物自体という〕前提なしには体系の内部に入っていくことはできず、その前提とともにには体系のうちにとどまることはできない」(JW2, 109)という有名な批判に表われているように、「物自体」もまたポスト・カント哲学の最も重要な争点のひとつであった。

フリースにとって「物自体」は、〈表象とその対象との一致〉たる「超越論的真理」で問題になる。だが、フリースの「超越論的真理」においては、「表象の対象」は「物自体」と実質的に同一視されており、通常の意味での〈知と対象との一致〉とは異なる(vgl. 113頁以下。おそらく、通常の意味での一致は「経験的真理」に含まれると思われる)。カントにとっても、私たちの認識の「素材」となる感覚的なものは「物自体」から「触発される」(KrV, B 33)限りで私たちのうちに与えられるが、私たちがその「物自体」の性状をいかなる意味でも表象したり、認識したりすることはできないと

¹¹ Reinhold (2003), S. 203.

される。「しかし、私たちの悟性はすぐさま自分自身に対しても、カテゴリーによって物自体そのものを認識しないこと、それゆえ物自体そのものをただ未知の何か或るものという名称のもとでのみ思考する、という限界を設定する」(A. 256/B. 312; vgl. A. 30/B. 45)。或いは、こうも言われる。「したがって、私は後者〔物自体が現象に関係づけられる〕場合、超越論的反省において、いつでも私の諸概念をただ感性の諸条件のもとでのみ比較せねばならないであろう。そして空間と時間は物自体の規定ではなく、現象の規定であることになるだろう。物自体そのものが何なのかということ、私は知らず、また知る必要もない。というのも、私にとっては、物は現象においてそうする以外には決して現われえないからである」(A. 276f./B. 332f.)。この点でも、フリースはカントに忠実である (vgl. 115 頁以下¹²)。

だが、フリースは「物自体」と「現象」の区別をストレートに継承せず、「物 (Ding)」を起点とする「物が現象する仕方」と「物の本質」へと区別し直している。著者によれば、この区別をすることで「我々の知識の射程が制約されていることを認めることによってのみ、我々の認識能力によっては認識されないような「物」の存在の側面が存在するということが、正当化されうる」(119 頁)。この批判は、評者の見る限りでは、上述の「知的直観」や「哲学」の課題の理解にある「すれ違い」と関連している。そうでなければ、そもそも認識不可能な「物自体」を表象できないのは当然であり(本書の表現では、「物自体」は「現象」から独立に存在する存在者として理解されている」(116 頁)などと言われる)、ラインホルトらも「物自体」の把握を目指しているわけではないため、「物自体」の背後にさらにその根拠となる「物」を想定して、そこから「現象」と「本質」を振り分けることに批判としての哲学理論的な意義を見いだすことは難しいと言わねばならない。フリースの言う「物」の地位をどう考えるのかも問題含みの問いであろうが、それは主題ではない。彼の主眼は、シェリングの「無差別」の概念のように、私たちに認識不可能な「超越論的真理」を認め、それを認識できるように振る舞う立場を退けることにあるのだろう (vgl. 116 頁)。

だが、評者にとって疑問なのは、〈「現象」と「物自体」との混同〉はラインホルトら三者の超越論哲学への批判としての的を射たものなのだろうか、ということである。たしかに、経験的な地平を離れることを拒絶するフリースにとっては、フィヒテや(自我哲学期の)シェリングらが唱える「絶対的自我」などは、まったく承服しえないだろう。だが、その批判がなされたことと、それが批判として成立しているのかどうかは、別の問題であるように思われる。繰り返しになるが、彼らの言う「知的直観」とは、「物自体」を把握するためのものでもなければ、感覚を越えて客観の本質を捉える

¹² 本書では、「現象」を「物自体」と見なす、「現象」と「物自体」を混同する立場を克服しようとしていたとされるが、私見では、この時期のドイツでは「物自体」の地位そのものをめぐった論争のほうが主流だったように思われる。たとえば、I. C. ディーツや J. F. フラットなどの批判がそうである。

(カントが否定したときに想定していた「知的直観」のような) 叡智的能力ではない¹³。こちらも繰り返しになるが、ラインホルトらの「哲学」では、〈メタレベル〉の「知」の成立根拠そのものを問うているのだから、「物」という論点の挿入は「批判」としてはあまり効果的ではなく、議論が噛み合っていないような印象を受ける。というのも、三者にとっては、「物自体」のステータスは問題ではなく、——先の表現で言えば——批判哲学の「前提」こそが問題になっていたのだから。

これと同様の構図の「すれ違い」として、当時のドイツの「シュミート-フィヒテ論争」を挙げることができる。この論争でも、「事実(帰結)」と「根拠(前提)」、「経験心理学」と「超越論哲学」という、まったく重ならない位相での批判的応酬がなされた結果、フィヒテはシュミートによるいかなる批判も黙殺すると宣言するに至った¹⁴。これと同じように、フィヒテやシェリングであれば、〈超越論的真理〉へ向かうことを制限し、「経験的真理」のうちにとどまり、「知」や「真理」を解明すること)を「哲学」とは呼ばないであろう。ラインホルト、フィヒテ、シェリングとフリースは、立っている〈地平〉が重なっていない。喩えるならば、彼らは皆同じ「哲学」という名前の建物にはいても、それぞれが1階と2階にいて喧嘩をしているようなものである。それぞれは、自分こそが真の「哲学」をしていると自称しながら、一方は、相手が「哲学」と称して理解不可能な極度に抽象的・形式的・主観的な概念を弄んでいると見なし、他方は、相手が経験的な事実しか見ていないと考えている。これでは、フィヒテとシュミートの論争と同様に、議論は物別れとならざるをえない。

もしこの見立てが正しいのだとすれば、本書は『ラインホルト、フィヒテ、シェリング』におけるフリースの超越論哲学解釈の枠組みそのものも検討すべきではなかっただろうか。フリースにとっては、自分が行なっているのは当然「哲学」なのだから、それを強調するよりも、——先の例に引きつけて言えば——フリースの「哲学」が、〈建物〉のどの位置にいるのかを見極めることこそ、解釈者に要求されていることであろう。たとえ一方が超越論哲学的であり、他方が経験心理学的な特色が強いのだとしても、そこには優劣はなく、それぞれの方向性が異なるというだけの話である。このことによって、フリース自身の立ち位置(つまり、「心理主義」か「哲学」かではなく、どのような特質の「哲学」なのか)もより明白になるのではないかと思われる。もちろん、それはラインホルトらの解釈にも当然言えることである。

3. むすびにかえて——フリースの立ち位置をめぐる提起

ところで、こうした方向性の違いについて、マックス・ヴントは『イエーナ大学の歴史的経過における哲学 (*Die Philosophie an der Universität Jena in ihrem*

¹³ Vgl. KrV, B. 307, 342.

¹⁴ 「シュミート-フィヒテ論争」の経緯については、田端(2019)、247頁以下。

geschichtlichen Verlaufe)』(1932年)において、カント哲学の受容の方向性を3つに分類している¹⁵。その区分けされた哲学者の配置にはやや疑問が残るものの、彼は大まかに、(1) 心理学的方向性、(2) 超越論的方向性、(3) 形而上学的方向性、と特徴づけている。本報告に関わる人物だけをピックアップすれば、彼は、(1)の「心理学」にはラインホルトとシュミートとフリースを、(2)の「超越論」にはフィヒテを、そして(3)の「形而上学」にはシェリングを位置づけている。もちろん、各哲学者には、こうした単純な枠組みには収まらない思想が含まれていることは承知しつつ、以下では、この分類を手がかりにして、「心理学」について簡単にまとめ、本書の議論を承けた「ドイツ古典哲学」の文脈にひとつの見通しを提起してみたい。

本報告の冒頭で軽く触れたが、現在の私たちが「心理学／心理主義」ということで思い浮かべることがらと、当時のドイツの「Psychologie (Seelenlehre)」は同じではない。「心理学」は「哲学」と密接に関連しており、批判哲学以前のカントもまた「(経験)心理学」に依拠して「心の能力」を分析していた。そうしたなかでドイツ哲学史における「心理学」が担う役割も変化したが、その一方で近年「心理学」概念への見直しも進められている。ザントウィーク(Zantwijk)によれば、ヴォルフが18世紀ドイツ哲学の「(経験)心理学」に与えた影響は、次のようにまとめることができる。

人間の魂が、つねにすでに論理的な規則にしたがっているのであれば、論理的推論の規則は、心的なプロセスの形式的な表現として把握できるように思われる。さらに、ヴォルフとともに、魂における過程が経験的に探求されるのだと仮定するならば、経験的心理学には、政治的な行為や道徳的な行為のような論理的な働きの、経験的基礎を明らかにするという課題が生じる。つまり、ヴォルフにとっては、こうした〔行為の〕基礎のメルクマールの詳細な叙述をもたらす〔のが、経験心理学の課題なのである〕。論理学が思考の規則を探求するとすれば、経験的心理学は、その論理的形式によって規定される現実の思考のプロセスを探求するのである。それによって、経験心理学は特に論理学の入門(Propädeutik)という課題を受け取ることになる。つまり、ヴォルフ的な意味での心理学的な認識を通して、私たちは論理的〔に思考する〕能力を獲得することができる¹⁶。

ザントウィークは、ヴォルフが「論理学」と「経験心理学」を結びつけ、その両者の関係が「思考の規則」の探求と、その規則にしたがって実際に私たちが「思考する能力」の習得との関係として、ドイツ哲学のうちに流れ込んだことを指摘している。すでに本報告が述べたように、この両者の結びつきはカントによって一旦切り離された

¹⁵ Wundt, SS. 140ff.

¹⁶ Zantwijk, *op. cit.*, S. 21f.

のだが、実際には、この「規則の教説」と「規則の習得」の問題は、カントにおいても「応用論理学」の問題として依然として残されていたのだという。注目したいのは、カントの後（つまり、ポスト・カント哲学）の哲学者たちの受容である。ザントウィークは、シュミート、フリース、そしてキーゼヴェッター（Johann Gottfried Christian Kiesewetter, 1766-1819）らを、このヴォルフ的伝統を継承する試みとして、カントの「再心理学化（Repsychologisierung）」¹⁷として整理している。だが、この「再心理学化」はただのヴォルフの「復活」でもカントの「主観化」でもなく、カントへの批判でありつつ、カントの〈隠れた構想〉を引き継ぐものでもあり、一種の「批判哲学の徹底化」でもある点が非常に興味深い。他にもザントウィークは、フリースが自らの導入部門を「経験心理学」から「人間学」へと変更した要因について、シュミートの「人間についての学（Wissenschaft von Menschen）」¹⁸の影響であることなどを指摘しており、本書の論点に関連する興味深いトピックをいくつも呈示している。こうした研究によって明らかにされているのは、必ずしも「心理学的」を「非哲学的」というニュアンスで解してはならないということのように見える。

さて、最後に、評者自身の関心に引きつけてまとめておけば、本書を読んだ評者にとって最も有意義な示唆は、いわゆる「ドイツ観念論」の思想の〈隠れた軸〉のひとつが「心理学」だったことである。実際、「心理学」は『一般学芸新聞』でも「哲学欄」と並んで独立する項目に分けられていたし、テュービンゲン・シュティフトでシェリングやヘルダーリン、ヘーゲルらが受講したフラットの講義にも、「形而上学」と並んで「心理学」があったことが確認されている。もし、いっそシュミートやフリースら「心理学的方向性」の伝統を「再心理学化」として評価し直し、そうしたヴォルフ・カントを通じた正統な「心理学」の基軸を（陳腐な「心理主義」としてではないかたちで）「ドイツ観念論」の時期に持ち込むことができれば、「ドイツ古典哲学」としてより包括的に思想の布置を解明することが可能なように思われる。そしてそれは、著者が目指した（目指している）「もう一つのドイツ哲学史」の究明にも重なるように思われる。

凡例

Br: Hegel, Georg Wilhelm Friedrich, *Briefe von und an Hegel*, Bd. 1: 1785–1812, Hamburg: Felix Meiner.

GA: Fichte, Johann Gottlieb, *J. G. Fichte-Gesamtausgabe*, hrsg. von der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, Stuttgart-Bad Cannstatt 1962ff.（系列数はローマ数字、巻数と頁数は算用数字によって示す。）

HKA: Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph, *Historisch-Kritische Ausgabe*, hrsg. im Auftrag der Schelling-Kommission der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, Stuttgart-Bad Cannstatt: Frommann-Holzboog, 1976ff.

¹⁷ Ibid. S. 22.

¹⁸ Ibid. S. 33.

JW: Friedrich Heinrich Jacobi, *Werke*, hrsg. von Klaus Hammacher und Walter Jaeschke, Hamburg: Meiner/ Stuttgart: Frommann-Holzboog, 1998ff.

KA: Kant, Immanuel, *Kant's Gesammelte Schriften*. hrsg. von Königlich Preussische Akademie der Wissenschaften, Berlin 1900ff. (数字は巻数、頁数を示す。『純粹理性批判』からの引用は、KrVの略号を付し、慣例にならって初版をA版、第二版をB版として、頁数をそれぞれ示した。)

原文の隔字体(ゲシュペルト)は傍点で表わす。引用文中の〔亀甲括弧〕は引用者の挿入である。

文献表

Beiser, Frederick C. (1987), *The Fate of Reason: German Philosophy from Kant to Fichte*, Cambridge, MA and London: Harvard University Press.

Cassirer, Ernst (1932), *Die Philosophie der Aufklärung*, Tübingen: Mohr Siebeck. (カッシーラー『啓蒙主義の哲学』(上)(下)中野好之訳、ちくま学芸文庫、2003年)

John, Matthias (2002), „Empirische Psychologie“ im System der Wissenschaften um 1800, *Psychologie und Geschichte*, 10, 3/4, SS. 166-177.

Reinhold, Karl Leonhard (2003), *Beiträge zur Berichtigung bisheriger Mißverständnisse der Philosophen*. Mit einer Einleitung und Anmerkungen hrsg. von Faustino Fabbianelli, Hamburg: Meiner. [PhB 554a]

Schröpfer, Horst (1995), Carl Christian Erhard Schmidt – der „bedeutendste Kantianer“ an der Universität Jena im 18. Jahrhundert, in: Norbert Hinske, Erhard Lange, Horst Schröpfer (Hrsg.), *Der Aufbruch in den Kantianismus: der Frühkantianismus an der Universität Jena von 1785-1800 und seine Vorgeschichte*, Stuttgart: Frommann-Holzboog.

Wundt, Max (1932), *Die Philosophie an der Universität Jena in ihrem geschichtlichen Verlaufe*, Jena: Gustav Fischer.

Zantwijk, Temilo / Ziche, Paul / Eckardt, Georg / John, Matthias (Hrsg.) (2001), *Anthropologie und empirische Psychologie um 1800: Ansätze einer Entwicklung zur Wissenschaft*, Köln, Weimar und Wien: Böhlau.

河村克俊 (2022)『カントと十八世紀ドイツ講壇哲学の自由概念』晃洋書房。

田端信廣 (2019)『書評誌に見る批判哲学——初期ドイツ観念論の展相:『一般学芸新聞』「哲学欄」の一九年』、晃洋書房。